

所蔵作品展「MONATコレクション」
「コレクションによる小企画 遠くへ行きたい」展

会期 二〇一八年十月六日—二〇一九年一月二十日 会場 美術館ギャラリー4 二階

「遠くへ行きたい」、その先は？

古館 遼

絵を描いている期間は、何処か遠くに旅行しているような気がしている。遥か海の彼方の北極の水の中や人間の入れない花の中や音楽に合わせて舞っているような、何か人間の食事でない食事をしているような気がしている。「註1」

この一節は、画家・難波田史男が早稲田大学在学中に書いた文章より引いたものである。在学中、学生闘争の渦中に身を置き、心に傷を負った難波田の描く絵には、哀感の

にじむ主題が多くなっていた。そして、緻密な線が縦横に走り、鮮やかな色彩がせめぎ合う画面は、繊細さを増した線描と、淡い色彩同士が溶け合うような画面へと変化していった。《流浪の人》〔図1〕という小さな作品は、その後者にあたる。画面右の方に、薄暗い荒野のような場所の中にたたくむ人のような形が見える。先に引いた文章を綴った当時（一九六八—一九六九年）の状況と考え合わせれば、この人物に、作者自身の姿を重ねることもできる。難波田は、絵を描き続けることによって、直面している現実から束の間でも逃れ、どこか非現実的な時間、空間の中に身を置くことを希求していた



図1 難波田史男《流浪の人》1970年 東京国立近代美術館蔵

のだろう。文章と絵画のいずれもが、作者の思いを切実に、しかし軽やかに伝えている。

「遠くへ行きたい」は、永六輔作詞・中村八大作曲で、さまざまな歌い手によって半世紀以上にわたって歌い継がれている曲であり、現在もテレビ放送されている同名の旅番組のテーマ曲でもある。この曲（曲名）を主題として、コレクションによる小企画（二月二十日まで開催）を構成しようとしたのは、美術が——例えば難波田にとってそうであったように——作り手の思考を「遠く」へと運びうるものであると同時に、鑑賞者にとってもまた、日常とは違った場所や時間へ思いを巡らす手段となるものであることを考えたとき、「遠くへ行きたい」の表題と詞が、導入としてふさわしいと考えたためであった。実際、その詞の中に表された語り手（歌い手）の思いは、冒頭の難波田の文とも共鳴するように思われる。一方で、本企画には、旅行をモチーフにした作品や、名所絵などは含まない。そうした具体的な場所を思い起こさせる作品ではなく、漠然とした「遠く」への憧れを喚起する作品や、どこもしれない場所をさまざまう姿を描いた作品を集め、日常と非日常、現実と非現実との間を往還するような体験を与えてくれるものとしての美術について、改めて思いを致す機会を作りたいと考えた。

作品を選んでいくにあたって、初めに念頭にあったのは、展示の冒頭に取り上げた北脇昇の《クォ・ヴァディス》〔図2〕である。茫漠たる大地にたたくむひとり的人物。足元の道しるべが示す先には、どこか不穏な光景が広がっている。どちらへ向かおうとしているのか、あるいは進むべき方向に迷い、途方に暮れているのかもしれない。その後ろ姿が、今ある状況から離れた、「遠くへ行きたい」という願望を示しているように思われた。

本作は、第二次大戦の余波がまだ大きい時期に描かれたものであり、その時代を映す表現としてしばしば言及されてきた。しかし、それだけでなく、具体的なモチーフを大きく省き、様々な解釈の余地を残していることによって、画面中央の人物が直面している分岐点は、様々な事柄に置き換えることも可能である。



図2 北脇昇《クォ・ヴァディス》1949年 東京国立近代美術館蔵

この絵を見る人が、遠方を望む中央の人物の姿に自らを重ね合わせることもでき、一時代の表象というのとどまらない性格を持ちえているように思われる。

北脇昇と難波田史男、それぞれが大きな時代の転換点に直面する中で、置かれた状況から離れた場所への思慕を感じさせる作品を残したことは示唆的である。それは、「遠くへ行きたい」の歌詞がそうであるように、社会の様々な動きの只中に身を置く私たちにも訴えかける普遍的なテーマを内包しているだろう。

ところで、「遠くへ行きたい」の歌詞には、行き先も、語り手(歌い手)がどのような状況にあるかも描写されず、聞き手の想像にゆだねられている。ここではないどこかへ行きたいという思いは、そこからどこへ向かうだろうか。

永六輔は、著書『遠くへ行きたい』のあとがきに、当時の自分と同じ年齢で投身自殺した詩人・生田春月の詩によせて、次のように書いている。

ここに並べて「遠くへ行きたい」の歌詞を書く気にはなれない。僕の旅はやっぱり、我家に帰ってくる旅なのである。

「遠くへ行きたい」は「たてまえ」で、「家へ帰りたい」というのが「ほんね」なのだ。

〔註2〕

「遠くへ行きたい」の中に描かれているのは、初めから帰る場所を想定した旅ではないらしい。明確な目的地はなく、行き着く先も定まっていな旅である。



図3 長沢秀之《生命体 No.8》2008年 東京国立近代美術館蔵

小企画の展示の後半には、こうした

テーマに呼応するような作品を選んだ。存在の不確かさや、空虚さを見つめ、描き続けてきた、長沢秀之の《生命体 No.8》³も、そのうちの一点である。画面上部に漂うのは、宇宙飛行士の姿である。表情がなく、輪郭もおぼろげだ。何かを掴もうとしているようにも、抱きかかえようとしているようにも見えるが、その手の伸びる先には、ただ空虚が広がっている。そ

して、作者本人よりご教示を受けて気づかされたが、宇宙飛行士の腹部に装着された生命維持装置は、髑髏に取って代わっている。そうだとすると、この空間からは死の匂いがより濃く感じられるが、宇宙飛行士が伸ばす手は、死の向こうから生をつかもうともがいているようにも見えてくる。「遠くへ行きたい」という思いの中の、葛藤を読み取ることもできるかもしれない。

もう一度、難波田史男の文章に戻ってみる。

画家は一度、十階のビルから身を投げなければならない。何故なら芸術とは世界のエッセンスなのだから。すくなくともそれだけの気力がなければならぬ。それが出来ないなら、十メートルの飛び込み台からプールへドボンと飛んでみるのだ。

冒頭の文章と同じ所から引用したのだが、その姿勢の違いに驚かされる。難波田にとつて、そのいずれもが本当であり、そうした「行動」の先に、世界の広がりを見ていたのだろう。そして、作品を前にした私たちが見るのは、芸術家がこうして描きとめた、今ここでは目にするのでできない「遠く」の情景に他ならない。

「遠くへ行きたい」——この言葉が今日においても切実な意味を持っていることは、SNSなどを通してもうかがうことができる。ただ、現実としては、「遠くへ行きたい」という願望を抱くことがあっても、日々の生活に追われて行動に移し難かったり、それを口にするにすらはばかれたりすることもあるかもしれない。「遠くへ行きたい」という言葉には、虚無感をともなった、ネガティブな意味合いが含まれるからだ。そうであるならば、せめて、遠くへの想像をかきたててくれる作品と向き合い、非現実的な時間や空間へと思いを巡らせることで、束の間でも現実を離れた感覚を得られないだろうか。本企画には、そうした願いが込められている。

(美術課研究員)

註

1 難波田史男「49 デッサン 2」27才—28才『終着駅は宇宙ステーション』幻戯書房、二〇〇八年、四五〇頁。

2 永六輔「僕は乞食坊主——長い長いあとがきのさらにあとがき——」『遠くへ行きたい』文藝春秋、一九七四年、二三八頁。

3 難波田史男「49 デッサン 2」27才—28才『前掲書』四五〇頁。